

Extreme Japan

アマテラス=和霊（にぎたま）とスサノオ=荒魂（あらたま）、両極のカミサマの魂を持ちながら使い分けてきた日本は、その一対性の上にさまざまなスタイルを築いてきた。北山の金閣・東山の銀閣、歌舞伎の和事・荒事、侘び茶の草庵と黄金の茶室…。派手でパンクで賑やかな日本と静謐でブルージーで穏やかな日本。足し算でカブいて、引き算でワビる。振り切るのが肝心、いずれもすこぶる日本流だ。

Japan Concept 5

kabuku カブク

Japan Concept 6

wabi ワビ

今日瞬間瞬間に失いつつある

人間の根源的な情熱を呼びさまし、
とりかえすならば、新しい日本の伝統が
より豪快不敵な表情をもって
受けつがれるのです。

岡本太郎『日本の伝統』

kabuku

Extreme Japan



① 写真：高瀬智司



②



③

かぶ
傾きものがモード最先端。

①電飾の山、デコトラ。トラック野郎の濃密なこだわりがてんこ盛り。②きゃりーぱみゅぱみゅのクレイジーなKAWAII感性は世界を虜に。③氣志團はヤンキーのファッションスタイルを用いて、ツッパリ頭&学ランでキメた。④今治タオルの歌舞伎フェイスマスク。隈取りはパワフルな魔除けメイク。ブルゾンちえみにも通じる!? ⑤花魁は江戸のファッションリーダー。櫛やかんざしを盛りまくる。

④



顔見世は世界の凶なり夜寝ぬ人

井原西鶴



⑤

kabuku

Extreme Japan

能と歌舞伎と
ユースカルチャーを疾駆する
やりすぎ、つくりすぎ、
too muchでパンクな者たち。

能の根っこにあるバサラ・スピリット

カブクは歌舞伎の由来となった言葉だ。歌舞伎はそもそも変わった格好をする者たちをカブキものと呼んだことに発する。いわばパンクな連中という意味で、カブクは「傾く」と綴る。やりすぎ、つくりすぎ、英語でいえば、too muchということになる。

中世において風流は風流過差とも呼ばれた。風流はフリュウと読む。過差とは過剰ということである。まさにカブクことだ。当時、とりわけてパンクな者たちはとくにバサラ（婆娑羅）と呼ばれた。バサラとは過差であって風流服飾、さらには物狂いを意味した。都の住人にとって物狂いの連中はいかにも騒々しいものであったが、一方でいっときの物狂いに夢中になれることはすこぶるうらやましいことでもあった。

物狂いの風俗と風流はそのまま猿楽に流れ込んでいく。そんな中で風流やバサラの心の奥に潜む物狂いに着目したのが観世流の創始者・観阿弥だった。そこから能が確立していくことになる。

歌舞伎からきゃりーぱみゅぱみゅへ

能の確立は、かつてのフリュウの時代が終わったことを意味していた。このあとフリュウは、江戸のフリーユウへと転換していく。江戸幕府は、遊女や芸能民といった中世の漂泊の民たちを管理するシステムとして、遊郭と芝居小屋を用意した。これを悪所（あくしょ）という。ここから歌舞伎が生まれ、江戸の人々を熱狂させていく。

カブク文化は現代のユースファッションにもほとぼしっている。戦後のバンカラ、ツッパリ、スケバンといったヤンキー文化、ゼロ年代以降はギャルファッションやゴスロリファッションがリアルクローズ化する世界に抗ってきた。また、ドラッグクイーンや地下アイドル、忌野清志郎からきゃりーぱみゅぱみゅまで、現代のカブキものたちが時代とトレンドを切り拓いている。



浮世絵

浮世絵で多いのは美人画と役者絵。役者絵は歌舞伎スターのプロマイドとして膨大に描かれた。写楽の絵はトリミングが大胆で画風がバサラ。



新宿歌舞伎町

大戦後、焼け野原になった新宿に歌舞伎劇場をつくって復興しようと、歌舞伎町と名付けられた。結局劇場は建設中止されたが、街自体がド派手なカブキものになった。



提供：NORITAKA TATEHANA

館鼻則孝のヒールレスシューズ

レディー・ガガが履いて注目を集めたこの靴は、花魁の高下駄からインスピレーションを得たもの。ファッションリーダーはいつの時代も前衛的。



東京レインボープライド

写真：荻部太郎

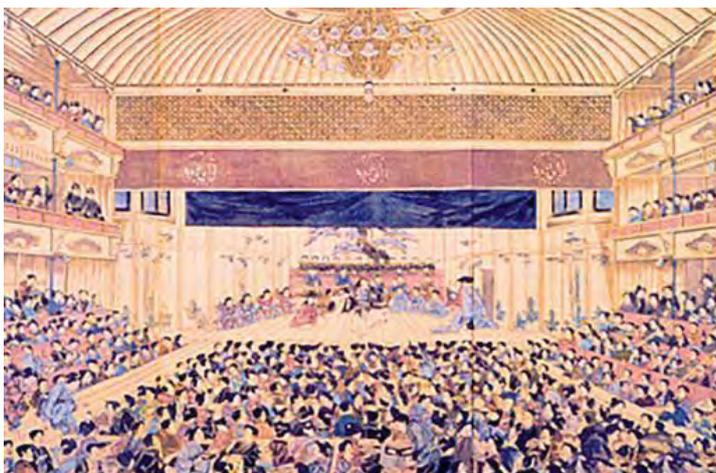
最近ではLGBTがカブク文化と結びついておもしろい。歌舞伎が男装からはじまったように、ジェンダーを飛び越える。

日本人が最も好む花が桜であることは、言うまでもない。その理由は、まさにこの花の開花の期間が、殆どうらめしいほど短い上、盛りを見とどける前に、花が散ってしまわないかという恐れが、ひどく大きいからである。

—ドナルド・キーン『日本人の美意識』



江戸の荒事と上方の和事



歌舞伎

漫画の歌舞伎化が流行中だ。「スーパー歌舞伎II ワンピース」に続いて、新作歌舞伎「NARUTO-ナルト-」も上演される。他方、前衛の動向としては、京都を拠点に活動する木ノ下歌舞伎のインディペンデントな試みが好評だ。絵は1893年頃の歌舞伎座（第1期）内観。

出雲阿国（いずものおくに）という女芸人が、カブキもののファッションを真似た男の格好をして四条河原で踊りはじめたのが歌舞伎のルーツとなった。女たちが男ぶりをして踊るこの女歌舞伎は爆発的な人気を呼ぶ。さらに、若い男性たちによる若衆歌舞伎があらわれてくる。いわば江戸時代の宝塚やジャニーズのようなものだ。

すると今度は、若者ではなくて大人の男たちが演じる野郎歌舞伎に変化する。これが現在の歌舞伎の原型になり、元禄時代になると市川團十郎というスーパースターが登場した。顔に隈取りをし、派手な格好で、大胆かつ豪快なキャラクターを演じる荒事をやって、一世を風靡した。一方大阪では、優美で繊細な芸風が好まれた。江戸が荒事を好み様式性を重んじたのに対して、上方は和事でリアリズムに向かったのだ。東西の対照的な芝居づくりが、歌舞伎の文化を厚くしていった。

ポップでクレイジーな原宿KAWAII世界観

ゴスロリやヴィジュアル系ファッションで着飾った奇抜な服装の女の子が原宿にはたくさんいる。むしろそこは現代の悪所ではないけれど、カブキものたちの服飾過差を許容する大切なアジールになっている。増田セバスチャンはこの街をモンスターに見立てた。KAWAII MONSTER CAFEは、セバスチャン流のポップでクレイジーな原宿KAWAII世界観が溢れるコンセプトレストランだ。原宿KAWAIIを求めて世界中から観光客が押し寄せる。

セバスチャンが最初に原宿に出した店「6%DOKI DOKI」には、無名時代のきゃりーぱみゅぱみゅも通ったそうだ。きゃりーがデビュー曲の「PONPON PON」のPVの美術にセバスチャンを指名すると、原宿KAWAIIは瞬く間に世界中に拡散していった。

江戸歌舞伎と上方歌舞伎が東西で競ったように、将来、KAWAII文化も各地各所で独自に発し、愉快的キソイが多発することもありうるだろう。



© KAWAII MONSTER CAFE

原宿カワイイモンスターカフェ（東京都 原宿）

毒々しく極彩色のカラフルレインボーパスタやカラフルポイズンパフェ・エクストリーム！ お店のコンセプトを体現したファッションを身に纏うMONSTER GIRLが観光名物。

①



②



③

黒樂茶碗 銘秋菊 15代樂吉左衛門作
共箱蓋裏「秋菊有佳色 裛露綴其英 汎此忘憂物
遠我遺世情 (壽光印) 吉左 (花押)」 吉左衛門筆

引き算の イメージネーション。

見渡せば 花も紅葉も なかりけり

浦の苦屋の 秋の夕暮

藤原定家



④

①無印良品はシンプルな機能美を追求する。②盆栽には花鳥風月をつかった日本人の人為的な自然観が象徴される。③千利休によりプロデュースされた黒樂茶碗。これは15代樂吉左衛門の「黒樂茶碗 秋菊」（樂美術館蔵）。④現代美術家・吉岡徳仁によるガラスの茶室「光庵」。⑤日の丸弁当の潔さ。白地に赤丸を愛でていただく。



⑤

wabi

Extreme Japan

手持ちのもので精一杯の心を伝える。
その「取り合わせ」の美意識に、
「おもてなし」の本来がある。

「ごめんなさい」の美学

日本文化のキーコンセプトの一つ「わびさび」。侘びしく寂しい様をあらわす言葉としてよく用いられるが、その本来の意味は案外知られていない。

「ワビ」は「侘び」、「詫びる」の気持ちがおもとにある。ワビを持ち出すためには、なぜ詫びるのかを知っておく必要がある。

「こんなものしかありませんが」と、十分なものを用意できなかったことを詫びているのである。その粗相を心から詫びつつも精一杯のものを用意することがワビの気持ちというものであり、そこから侘び茶の意識も生まれた。

余白を想像力で補う日本の美意識

侘歌・侘言・侘人・侘声といった侘びるという言葉は万葉時代からすでにあった。それを美意識にまで高め、ワビという不思議な感覚世界をつくりあげたのは村田珠光だ。侘び茶の創始者である。珠光が試みたことは、それまでは中国渡来の唐物などの道具を持っていなければろくな茶数寄ができないと思われていたところへ、間に合わせの手持ちの道具を心を尽くして用意すれば、そこに新たな茶の心が生じるはずだというまったく新しい茶の方法だった。

珠光は一人一人が自分で創意工夫をするアソシエーションやコンビネーションの美を発見した。こうして、「間に合わせ」「取り合わせ」でもいいのだという、とんでもなく控えめな哲学がラディカルに出現することとなる。侘び茶は、削ぎ落としてこそ見えてくる「打ち消しの美」や「負の美しさ」を研ぎ澄ませながら、連歌師の武野紹鷗に伝わり、利休にいたって完成に達する。

ワビ・サビは、総合や正面や本体から零れるところにはじまった感覚だ。したがって、全面に押し出して議論したり表現すること自体がこの概念には似合わない。たちまち、ワビでもサビでもなくなっていく。OMOTENASHIマインドも過剰になればなるほどに、珠光が発案した本来の「もてなし」（持成）から外れていく。ワビの精神に、日本のホスピタリティの本来をたどりたい。



お茶漬け

「こんなものしかありませんが…」が、最高のごちそうになるのが、お茶漬け。お米とお茶の絶妙なコンビネーション。



ミニマルライフ

本当に大事なものだけを見極めて取り入れる「持たない暮らし」。「断捨離」もミニマルライフに通じる。



写真：横須賀功光

一枚の布ニット (1977春夏)

根源的な衣服のあり方から発想を得た三宅一生の「一枚の布」。たたむ、折る、切る、くりぬくなど創意工夫に満ちている。



紙の器 WASARA

紙皿にもおもてなしの心を……。シンプルで有機的なフォルムがもつ「余白の美」は料理の繊細さを際立たせ、器を手にする人々の所作さえ美しく見せてくれる。

Cool Japan ●

わびさびは

不完全ではなく未完成のものが織りなす美

謙虚で慎ましやかなものが織りなす美

ありきたりでないものが織りなす美

—レナード・コーエン『Wabi-Sabi わびさびを読み解く for Artists, Designers, Poets & Philosophers』

wabi

Extreme Japan

温石と懐石と一汁三菜のワビ

茶の湯の席では茶の前に簡単な料理がふるまわれる。かつてこれは「ふるまい」とか「会食」、あるいは「会席」といわれていた。のちにそれが禅の「温石」（おんじゃく）の意義を借りて、「懐石」と綴られるようになった。

温石とは懐に入れて体を温める焼き石のことだ。したがって、懐石とは間違っても高級料亭の豪華なコース料理のことではない。また、必ずしも和食と同義でもない。もとをたどれば、南方中国的な精進料理であり、温石の保温時間くらいに一時ばかりの空腹をしのぐに過ぎない食事を意味しているのである。

懐石の誕生とともに、吸い物や葛切りやそうめんも生まれた。江戸期に入ると、こうした茶事の懐石はさらに見事な調理力を発揮して、原則として一汁三菜を求めるようになった。



HIGASHIYA GINZAの一汁三菜（東京都 銀座）

伝統美を追求する現代の“日本のティーサロン”「HIGASHIYA GINZA」のランチメニュー。節気茶、主菜と副菜3種、節気汁、御飯、香の物、季節の生菓子。二十四節気で内容が変わる。



日本の風景に溶け込む 洗い晒しのジーンズ

日本で初めてジーンズを穿いたのは白洲次郎だといわれている。1960年代に国産ジーンズの製造がはじまって半世紀が経過した現在、丈夫なデニム素材のジーンズは日本人の生活に欠かせないものになった。ファッションとしてはもちろんのこと、風景にすら馴染んできた。たとえば、都会の賃貸アパートの窓際につるされた洗い晒しのジーンズなどは「間にあわせ」のジャパニーズ・アーバン・スタイルとして様になる。

洗い晒しというのも日本流のポイントだ。洗い晒しの風合いを生み出すストーンウォッシュ加工を開発したのは日本の企業だった。古びた色合い、クタクタ感や破れ穴、負の美しさを遊ぶダメージジーンズは、日本人のワビ・サビ感覚ととてもマッチするのだろう。「ジーパン」「ジーンズ」「デニム」と愛称は移り変わりながらも、ずっと若者とともにある現代日本のワビ・スタイルだ。

ビッグジョンのダメージデニム（岡山県倉敷市）

国産ジーンズ第一号は岡山県倉敷市のマルオ被服（現・株式会社ビッグジョン）が縫製した「キャントン」だといわれている。1980年にはビンテージ加工技術としてムラ糸を世界に先駆けて開発した。